

立神峡だより

クルーズ船から大勢の中国人が立神峡へ

7月15日に八代寄港のクルーズ船から、大型バス11台に乗って大勢の中国人観光客が立神峡を訪れました。

これは、外国人観光客を取り込むことで観光地としての立神峡を広く周知するために行った初めての取り組みです。旅行会社との交渉から、進入経路・駐車場の確保、下車後の誘導やガードマンの設置など、綿密な調整と打ち合わせを行い、この日を迎えました。綿密な準備のおかげでスムーズに進行し、吊り橋や管理棟周辺は中国人観光客で大いにぎわいました。



年間60隻のクルーズ船が、近い将来に120隻に拡大することから、ほぼ毎週外国人観光客が来航することになります。この人たちを取り込むことが出来るかによって将来の氷川町も大きく変わってくるとの思いで立神峡をまずは宣伝することに集中したいと思います。



キャンプサイトの階段を新設しました

立神峡にはキャンプサイトが13区画あり、連日多くの方がキャンプを楽しみに訪れています。そのキャンプサイトに設置してある階段は、補修をしながら長く使用していましたが、階段の上り下りが非常に危険となったため、安全を優先し新設することとなりました。

これにより、また多くの人たちが安心してキャンプを楽しむことが出来ると思います。

今年もコスプレイベントを開催

7月30日、地元を含む九州各県からコスプレイヤーが立神峡に集いました。アニメキャラクターに扮装し公園一帯を優雅にそして華麗に歩き回りながらカメラマンの注文に応じポーズをとっていました。

9月には地元の方が主催するコスプレイベントを立神峡で開催するとのことです。



氷川町の宿泊通学が開始

立神峡里地屋敷で氷川町宿泊通学体験が始まります。8月30日から9月1日までが竜北東小学校、9月6日から9月8日までが竜北西部小学校、9月13日から15日までは宮原小学校の順に行われます。。里地屋敷の宿泊通学を通して、「自主性・自律性・協調性を培う」、「家庭から離れた2泊3日の生活体験を通して、家族の一員として家族での役割を考え、実践できる態度を養う」また、「生活体験を学習成果や自然環境への興味関心を高める」ことを目的として、毎年実施されています。

今年は、どんな児童たちが来るのかスタッフ一同楽しみにしています。

【お問い合わせ先】立神峡公園管理棟
☎ 62-1543 FAX62-1546 (8:30~17:30 火曜定休日)

ホームページアドレス
<http://tategami-camp.com>

町民文化

短歌

夕散步足音に怖じて跳ね泳ぐ
大小のナマズ寄り添いながら

北野津 宮本 末秋

炎天下屋根を修理の瓦屋さん

玉如す汗に冷やしタオルを

吉本 高橋 澄子

病院の待合室でふと会った

難聴同志旧友と語らう

西野津 古崎スエノ

孫兄妹並びて作る盆だこの

お湯で踊りて黄粉まといて

南鹿野 尾崎 京子

百五歳生涯現役貫ける

日野原医師もついにみまかる

西上宮 村内 一誠

初盆の時の流る意識すつ

故人を偲ふ盛夏の夜空

西野津 古崎 栄子

老鶯の命しぼりて鳴く谷を

ここが浄土と思ひつつ行く

桜ヶ丘 宮崎敬四郎

大荒れの昨日と変わるセミシグレ

今日は一日感謝で暮す

上鹿島 前村 俊子

俳句

もう猛暑や朝から呻く牛蛙

北野津 宮本 末秋

花みづき仄かに匂ふ美容院

吉本 高橋 澄子

初挑戦南高梅の漬け上がる

西野津 古崎スエノ

蝉しぐれ炎天抜けて夏を知る

南鹿野 尾崎 京子

湯上りの水の旨みの喉ならす

西野津 古崎 栄子

夜の雷妻のねむりをさまさずに

町 香山菊童子

百日紅空に広がり紅燃ゆる

西上宮 村内 一誠

朝まだき妙なる光紅蓮

桜ヶ丘 宮崎敬四郎

親族の笑顔で交わす盆の酒

桜ヶ丘 吉田 照子

何とまあ

いとしき曾孫の盆帰り
町 田中 澄子

百雷の去りて安堵の一滴

桜ヶ丘 宮崎トシ子

里芋の丸ま葉の中か雨踊り

上鹿島 前村 俊子

投稿いただきませます作品は、短歌・俳句それぞれ一句とします。必要な場合は、ルビを付けてください。また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いします。

悔悟というほどのものでなし

〜過ぎ去りし心象〜②

…このエッセーは、概ね三十年

近くも過去の作品である…

法道寺 本田 花風

悔みとは、そのこと自身ではありません。それは、まがりなりにも退院終了証書を手にした五カ月の月日を費やした後のことになりました。浦島さんほどの時代錯誤に陥ることもなく無事職場復帰となり、職場放棄の負い目もさほど感ぜず、以前の横柄な自分に戻っていましたが、そのことに気付くのは何時のことだったのかさえ、自身も定かではありません。それは、世間でいう『快気祝い』のことであり、その欠礼をしていた事実を不幸にも気づいてしまったことでした。上司、先輩、同僚へ欠けた気配りの怠慢が後々にいたり、建前だけの義理と人情の「過悔」の念となり心象となっていたのです。ひよつとすれば今日の自分の義者

の姿にその反動が現れているように思えます。

さて、もう一つの「過悔」を活字にするには多少の勇氣と恥を忍ばねばならないことになります。

昭和三十七年七月、父親の添状を胸に、小雨降る城下町にいたのは駅から歩いて十五、六分、街並には似つかわぬ高いエンツツのある白い建物の職場の感慨はもう遠く遙か昔になりました。正門を通り抜け玄関に入ろうとすると、「何の用だ！」突如、年配の監視員のきつい咄めがその職場との、赴任地人吉の地で臍の緒を切り放った瞬間でした。父は、私が中学一年のころ寝込み、そのまま職場復帰することはありませんでした。二省分離を経て通信事業への道を歩み、三十八歳で課長になり、当時としては早い昇進であったような話を聞いていましたが、帰宅は毎夜深夜だったそうです。

その父が床の中で書いた添え状に付されたであろう人々への恩義を自分の物として深く胸に刻み込んでおけるほどの配慮は、十八歳の青年の領域を超えるには至らず、また恩義有る彼の人々のことにしてもそう深く知らされていなかったのです。

また、己がその渦中に巻き込まれることを避けたいという歯触りの悪さと、そして自分自身、結婚二十年、三十年と人社から幾多の節目を重ねることで、その負い目を背負っている事実を、時代や世俗の流れの中でかき消すことを意識していなかったが、月日という衣が大方の人々もそうであるように自責の念が薄皮一枚ずつ剥ぎ取られていく日々でもあったのです。